

# 中学生の統合型HTP法における人物表現の関連性

Human Relationships in Synthetic House-Tree-Person Drawings  
by Japanese Junior High School Students

加藤 大樹<sup>1)</sup>, 鈴木 美樹江<sup>2)</sup>

Daiki KATO, Mikie SUZUKI

## 問題と目的

HTP法は、Buck (1948) によって開発された投影描画法の1つである。Buckによる原法では、家、木、人の3つのアイテムを個別の画用紙に描いていく。これをもとに、三上 (1995) は、1枚の画用紙の中に3つのアイテムを統合して描くものであるS-HTP法を考案した。S-HTP法はアイテムどうしの関連性なども総合的に評価できることから、心理アセスメントの媒体として幅広く活用されている。

S-HTP法の解釈仮説としては、これまでに様々な分類がされているが、ここでは、作品の全体像を捉えるアプローチと、個々のアイテムの意味に焦点を当てたアプローチに着目してみたい。S-HTPの全体的評価をするための視点として、三上 (1995) は、統合性、遠近感、アイテムどうしの関係付けなどを挙げている。また、Kato & Suzuki (2016) は、S-HTPの全体的印象を評定するためのシステムとして、STID (the Scale for Total Impression of Drawings) を開発した。これは、「情緒的安定性」と「文脈的整合性」の2次元から作品の全体的な印象を評定するものである。「情緒的安定性」は「活

動性」と「穏健性」の下位因子から構成され、「文脈的整合性」は「テーマ性」と「現実性」の下位因子から構成される。このように、心理アセスメントとしては、まず作品の全体的な印象を捉えることが重要であると考えられるが、それに続くステップとして、個々のアイテムの特徴について詳細に検討することが求められる。

S-HTPにおける個々のアイテムに注目した研究として、青山・市川 (2006) は、アイデンティティ感覚と描画特徴の関連を検討している。この中で、対自的同一性の低い人では人物の記号化が顕著であったり、心理社会的同一性の上昇に伴って人物と木の関連が見られたりすることなどが示されている。このように、人物に焦点を当てて作品と向き合うことは重要であると考えられる。瀨瀬・森田 (2011) は、青年期を対象に友人とのコミュニケーションスタイルと描画特性の関連を検討している。そして、中でも人物の表現が、描き手の感情・アイデンティティ・他者との関係の持ち方などが投影される媒体として機能する可能性を指摘している。人物表現に関して、Kato & Suzuki (2015) は、中学生のS-HTPにおける人物どうしの関連性に着目した検討を行った。実際の心理臨床場面におけるアセスメントでは、描か

1) 金城学院大学人間科学部

2) 金城学院大学心理臨床相談室

れた人物どうしや、人物と木や家との関連性を検討することは重要な解釈視点となる。しかし、基礎研究の中では、数量化の難しさから、これまで取り上げられることは少なかった。Kato & Suzuki (2015) は、例えば、人物どうしと一緒に遊んでいる、手をつないでいるなどの表現を「関連性」として捉え、被験者の性別との関係を検討した。その結果、女子の作品において、人物どうしの関連が多く認められた。この研究からも示されているように、中学生という発達段階においては、男子女子それぞれの対人関係やアイデンティティの築き方の特徴が描画にも表れていると考えられる。一方で、性別のみでなく、年齢や現実の対象関係の持ち方など、様々な要因が影響を与えることが予想される。そこで、本研究では、中学生によるS-HTP画における人物どうしの関連性に焦点を当て、学年や現実場面における対人関係が与える影響を検討することを目的とする。特に、現実場面における対人関係の指標として、重要な他者の存在に着目し検討を行う。

## 調査1

本調査では、中学生によるS-HTP画における人物表現に着目し、その特徴を検討する。表現された人物の人数や人物間の関わりの有無に着目し、学年や日常の対人関係との関連を検討する。

## 方 法

中学生199名（男性100名、女性99名）を調査対象とした。学年の内訳は、1年生71名、2年生62名、3年生66名であった。B5サイズ用の紙に、鉛筆を用いて、自由に家・木・人を含む絵を描くように求めた。人物表現に関して、描かれた人物の人数がカウントされた。また、人物が複数描かれた場合は、人物どうしの関連の有無が評定された。例えば、

手をつないでいる、一緒に遊んでいるなどの表現は、関連があるとみなされた。一方、それぞれの人物が離れて別の活動をしている場合や、記念写真のように並列に並べられている場合は、関連がないとみなされた。また、現実場面における対人関係の指標として、日常生活において困ったことがあった際に相談できる相手の有無について尋ねた。描画特徴と、学年や相談できる人物の有無との関連が検討された。

## 結 果

描かれた人物の人数の平均値は1.80、標準偏差は1.42であった。全体の25.6%に人物間の関連が認められた。学年間における人物の人数 ( $F(2,196) = 0.02, n.s., \eta^2 = 0.0002$ ) および人物の関連性 ( $\chi^2(1) = 2.08, n.s., \phi = 0.10$ ) には有意な差は認められなかった。相談できる相手の有無と人物の人数 ( $t(84) = 1.94, p < .10, d = 0.28$ ) およびの人物の関連性 ( $\chi^2(1) = 3.28, p < .10, \phi = 0.13$ ) には有意傾向が認められた。現実場面で相談できる相手がいる生徒の方が、描画における人物の人数が多く、人物間に関連性がみられた。学年・相談相手の有無と人物数をTable 1に示した。また、学年・相談相手の有無と人物どうしの関連をTable 2に示した。

Table 1. 学年・相談相手の有無と人物数

	Mean	SD
学年		
1年生	1.77	1.20
2年生	1.82	1.26
3年生	1.82	1.75
相談相手		
有	1.89	1.48
無	1.49	1.08 †
合計	1.80	1.42

†  $p < .10$

Table2. 学年・相談相手の有無と人物どうしの関連

	関連有		関連無	
	人数	%	人数	%
学年				
1年生	16	22.5	55	77.5
2年生	20	32.3	42	67.7
3年生	15	22.7	51	77.3
相談相手				
有	45	28.5	113	71.5
無	6	14.6	35	85.4 †
合計	51	25.6	148	74.4

†  $p < .10$ 

## 調査2

調査1では、学年や相談できる対象の有無から、S-HTPにおける人物表現を検討した。本調査では、描き手のパーソナリティ特性に着目し、人物表現との関連を検討する。パーソナリティ特性を測定する指標としてBig Five尺度を用いて検討を行う。

## 方 法

中学生185名（男性96名、女性89名）を調査対象とした。学年の内訳は、1年生65名、2年生59名、3年生61名であった。調査1と同様に、B5サイズの手紙に、鉛筆で自由に家・木・人を含む絵を描くように求めた。描画における人物どうしの関連の有無が、調査1と同様の基準によって評定された。また、曾我（1999）によるFive Factor Personality Inventory for Children (FFPC)への回答を求めた。

FFPCは、全40項目から成り、協調性、統制性、神経症傾向、外向性、開放性の5因子から総合的にパーソナリティを測定するものである。

## 結 果

FFPCの各下位尺度の信頼性が検討された。その結果、すべての下位尺度において一定の信頼性が認められた（協調性 ( $\alpha = .72$ ), 統制性 ( $\alpha = .68$ ), 情緒性 ( $\alpha = .82$ ), 外向性 ( $\alpha = .74$ ), 開放性 ( $\alpha = .79$ ))。

S-HTPにおける人物表現の関連性の有無によって調査対象者が2群に分類された。関連がみられた群は49名、関連がみられない群は136名であった。群間において、FFPCの各下位尺度の得点が比較された。その結果、統制性において有意な差が認められ ( $t(105) = -2.55, p < .05, d = 0.39$ )、協調性において有意

Table 3. パーソナリティ傾向と人物どうしの関連

	関連有		関連無	
	Mean	SD	Mean	SD
協調性	2.53	0.31	2.42	0.42 †
統制性	2.33	0.32	2.18	0.40 *
情緒性	2.17	0.47	2.16	0.57
外向性	1.99	0.45	1.97	0.49
開放性	2.19	0.51	2.19	0.56

\*  $p < .05$ , †  $p < .10$

傾向が認められた ( $t(117) = -1.93, p < .10, d = 0.28$ )。いずれも、人物間に関連のある群の方が得点が高い。情緒性 ( $t(101) = -0.14, n.s., d = 0.02$ )、外向性 ( $t(90) = -0.30, n.s., d = 0.04$ )、開放性 ( $t(92) = -0.05, n.s., d = 0.00$ ) においては有意な差は認められなかった。パーソナリティ傾向と人物どうしの関連を Table 3に示した。

## 考 察

調査1においては、まず、学年における人物表現の特徴が検討された。本研究の結果からは、人物の人数、関わりの有無ともに、学年による有意な差異は認められなかった。しかし、効果量に着目すると、人物どうしの関連の有無については、弱いながらも学年による違いを見て取ることができる。本研究では、人物像の質的な特徴には触れずに、その数や関係性に着目した検討を行った。三上(1995)は、S-HTP法の大規模な発達調査の結果、中学生の時期では1人の人物のみを描く割合が高くなることを指摘している。本調査では、描かれた人物の人数の平均値は1.80、標準偏差は1.42であり、実際の作品群においても、1人もしくは2、3人の人物を描く生徒が大半を占めている。中学生の3年間は、身体的にも心理的にも大きな変化を体験する時期である。さらに、児童期を終えて青年期を迎え、アイデンティティの形成という観点からも重要な時期である。そのため、自己イメージの投影である人物画には、調査対象者たちの内面が多分に投影されていると考えられる。学年別に人物どうしの関連を見てみると、2年生でやや関連のある割合が上昇している。このことには、中学生の各学年における対人関係や発達上の特徴が反映されていると推測される。1年生は、小学校から中学校へ進学したばかりの時期であり、これから様々な対人

関係を構築していく時期である。また、3年生は、中学校の課程を終え、一人一人がそれぞれの進路を模索していく時期である。これらの時期においては、個人としての特性や指向性に関心が向きやすく、このことが、描画においても複数の人物の関係性を描くよりも1人の自己像を丁寧に描くということにつながっているのではないかと。対照的に、2年生は、学業やクラブ活動などに最も自由に専念できる時期であり、関心や対人関係の幅も広がると考えられる。このような特性が、描画における人物どうしの関連という形になって表出されているのではないだろうか。

困った際に相談できる相手の有無と、S-HTPにおける人物の数に関しては、相談相手がいる群のほうが描かれた人物が多い傾向が認められた。同時に、相談相手がいる群では、描画における人物どうしの関連も多い傾向が認められた。S-HTPにおいて複数の人物が描かれた場合には、現実自己と理想自己、自己像と重要な他者など、様々な解釈が可能である。そのため、一義的な解釈に拘ることは避けなければならない。そのことをふまえた上で、解釈仮説の一つとして、拠り所となる対象や安定した愛着対象として2人目、3人目の人物が描かれる可能性もある。今回の調査では、家庭や学校における生活場面を想定し、その中で自分が困った時に実際に相談できる相手がいるかについて回答をしている。そのため、「はい」と回答した生徒の多くは、親や友人、教師など、特定の人物をイメージして回答していると考えられる。S-HTPにおける人物表現は、意識的な自己像としての解釈が可能であるが、中学生の描画において関連性のある複数の人物が描かれた場合、そこには、現実生活で意識されている重要な他者像が投影されている可能性もあると考えられる。

調査2では、描画における人物表現の特徴とパーソナリティ特性の関連を検討した。基本統計量として、人物どうしに関連がみられた群とみられない群は、それぞれ49名(26.5%)と136名(73.5%)であった。この比率は、調査1における結果とほぼ一致するものであり、信頼性の高いものであると考えられる。パーソナリティとの関連では、まず、人物どうしに関連の見られる群では、協調性が高い傾向が認められた。登張(2010)は、協調性を、「非利己的で、他者に対して受容的、共感的、友好的に接し、他者と競い合うのではなく、譲り合って調和を図ったり協力したりする傾向」と定義している。このように、協調性の高い人は、他者との協力や調和を重んじ、現実生活においても良好な対人関係を構築することに努めると考えられる。本調査における描画においても、一緒に遊んでいた、談笑していたりする場面が最も多く、敵対的な対人関係が描かれているものはほとんど見られなかった。協調性に含まれる対他配慮や親和欲求などの要素が、描画内のポジティブな人物どうしの関わりとして表出されたものと考えられる。

また、同時に、人物どうしに関連が見られた群では、統制性も高いことが認められた。統制性は、真面目さや誠実さに関わる因子であり、具体的な質問項目の中には、リーダーシップや、他者との約束を守るという内容も含まれる。この点では、先述の協調性における非利己的な協力態度と共通する側面もある。一方で、統制性の特性として、課題を計画的に遂行し、失敗や間違いがないかを心配するという側面も含まれる。このような特徴から、描画における他者の存在も、例えば、一緒に課題を遂行する仲間や、それに伴う心配や不安を受け止めてくれる対象などとして投影されている可能性もある。

今回の調査結果からは、情緒性・外向性・開放性との有意な関連は認められなかった。しかし、これらの要素は、個人のパーソナリティや病態水準のアセスメントを行う上で重要な視点である。本研究では、人物どうしの関連性という一側面からの検討を行ったが、例えば、描画全体の印象評定など、包括的な視点から検討を行うことで新たな関連が認められる可能性もあるため、今後の課題とした。

本研究では、学年やパーソナリティ特性の観点から、S-HTP法における人物表現の関連性について検討してきた。示された結果は、実際の心理臨床場面において思春期・青年期のクライアントの描画表現と向き合う際に有用な視点を提供するものであると考えられる。一方で、一言に人物の関連性といっても、実際の描画表現では、親和的なものや葛藤を含むものなど、様々な関係の形があり、今後はその質的側面も考慮に入れた検討が必要であろう。

## 文 献

- 青山桂子・市川珠理(2006). 青年期におけるアイデンティティの感覚と統合型HTPの描画特徴 心理臨床学研究, 24 (2), 232-237.
- Buck, J.N. (1948). The H-T-P technique: A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, 4 (4), 317-396.
- Kato, D. & Suzuki, M. (2016). Developing a Scale to Measure Total Impression of Synthetic House-Tree-Person Drawings. *Social Behavior and Personality*, 44 (1), in press.
- Kato, D. & Suzuki, M. (2015). Relationships Between Human Figures Drawn by Japanese Early Adolescents: Applying the Synthetic House-Tree-Person Test. *Social Behavior and Personality*, 43 (1), 175-176.
- 額田千晶・森田美弥子(2011). 現代青年の友人への交流態度からみたS-HTPの描画特徴 心理臨

床学研究, 29 (5), 634-639.

三上直子 (1995). S-HTP法 - 統合型HTP法における臨床的・発達のアプローチ 誠信書房.

曾我祥子 (1999). 小学生用 5 因子性格検査 (FFPC) の標準化 心理学研究, 70 (4), 346-351.

登張真穂 (2010). 協調性とその起源 - AgreeablenessとCooperativenessの概念を用いた検討 - パーソナリティ研究, 19 (1), 46-58.